

国 語 (B方式)

注 意

1. 問題は全部で8ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし、マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する番号の○を塗りつぶしなさい。○で囲んだり×をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が1のとき)

1	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

4. 一度記入したマークを消す場合は、消しゴムでよく消すこと。×をつけても消したことになる。
5. 解答用紙をよごしたり、折り曲げたりしないこと。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

花の語は古代の日本では、オシヨメノ貶下的な意味でつかわれていたという意味のことを、折口信夫が説いている。

足柄の箱根の嶺かろのこ草の花妻なれや紐解かず寝む〔萬葉集〕

花妻であろうか、花妻ではないから紐を解かずには寝られないという意味で、花妻は表向きの妻、手を触れられない見るだけの妻、ということになる。この歌を例として折口信夫は、「花に」という副詞は「もろく、あだに、いつはりに、上べだけ」を意味したと説明している。花は「物の先触れと言ふ処から、空虚なものに使用せられる、浮いた語なのである。」「花の話」。

実質を持つ「実」にたいして、上べだけの「花」である。花の美的鑑賞は中国から教えられたのであって、山部赤人の花への抒情の歌がその先駆的なものだったと折口は同書のなかでいう。

この系統のベジヨラティブな花の用法は、十世紀の『古今和歌集』にも出てくる。『古今和歌集』の序文のなかの、有名な一節である。

今の世の中、色につき、人の心花こころはなになりなりにけるにより、あだなる歌、はかなき言のみ出でくれば、色好みの家に、埋もれ木の
人知れぬこととなりて、まめなる所には、花すすき穂ほに出すべきことにもあらずなりにたり。

『古今』は花を、最大の主題にした歌集であり、序文の右の文章の少しまえでも、「花をめで鳥をうらやむ心から、さまざまの歌が生まれ出る、と説いている。その文脈の中で「人の心花こころはなになりなりにけるにより」歌のみちがすたれたといういかたは、¹やや唐突さを感じさせる。

『古今』の真名序の方では、この箇所は「オシヨメノ其実皆落、其華孤榮。至有好色之家、以此為花鳥之使」云々となっている。実にたいする花で、明らかに「あだに、いつはりに、上べだけ」の意味だろう。

しかし花が古代でも一方で美の代表と目されていたことは、いうまでもないのである。

『古事記』によれば邇邇ニニギノミコト藝命は「麗オシヨメノしき美人に遇あひ」、名を問うと木花このはな之佐久夜毘賣さくやびめとこたえた。父親に彼女を申しうけたいとい

うと、父親はその姉の石長比賣を副えて奉るが、石長比賣は「いと凶醜みにくきによりて」邇邇藝命はおそれをなして送りかえし、妹の木花之佐久夜毘賣とだけ寝る。水と玉とを主軸とする記紀の神話のなかで、ここだけが異質の「山」の挿話になっている。

姉娘の石長の方を送り返された父の神——大山津見神——は、大いに恥じて白し述べた。二人の娘を奉ったのは、石長比賣をお側にお使い下されば、天つ神の御子の命は雪にも風にもたえて恒に岩のごとく、また木花之佐久夜毘賣をお使いくだされば木の花の栄ゆるごとく坐さむ、と思ったからである。しかるに「ひとり木花之佐久夜毘賣を留めたまひき。故なれ、天つ神の御子の御寿は、木の花の阿摩比能あまひの坐さむ」。

「故、是を以ちて今に至るまで、天皇命等の御命長くまさざるなり」と『古事記』は注している。そこで人間の命は短くなつた、といった物語は、世界中どこにでもありそうな縁起譚たんだろう。しかしここにはすでに、美はうつろいやすく A は「凶醜」である、という明確な認識があるのであつて、この事実は注目にあたいる。

萬葉「花孀」の語も、名目だけの妻という意味にだけ使われていたわけではない。少しあとの時代になるが、大伴旅人に次の歌がある。

わが岳まかにさを鹿来鳴く先芽子はつはまの花孀問ひに来鳴くさを鹿「萬葉集」

萩を鹿の妻に擬し、早咲の萩の花やかな妻を求めて鹿が来ているの義であると、武田祐吉氏は註している。うわべだけの妻とこの場合も解釈できないことはないけれど、こううけとる方が自然に思われる。類似の語法は、大伴家持の長歌にもある。

折口信夫は花の「浮いた語」としての面を、——おそらくは啓蒙的な意図もあつて——強調するが、農耕民族としての通念から考えても、古代の日本人が花を単にベジョラティブな側面からだけ見ていたとは考えにくい。豊かな開花は、豊饒と結びつくのである。木花之佐久夜毘賣の伝説は、花へのむしろ二元的な認識を示している。花は麗しく、栄えを約束し、しかし生命は短いと記紀は明記する。対極が、岩だった(岩を神体とする神社は多い)。

脆さと美しさとの、この花の観念の二元性が、時代によってその比率を異にしてあらわれることになる。萬葉の「花孀」の両様の用法が、その一例である。家持はその恋を数々の花に託してうたつたが、同時に一方では「咲く花はうつろふ時あり」と歎じて

いる。『古今集』には僧正遍昭の、次の歌がある。

散りぬれば後はあくたになる花を思ひ知らずもまどふ蝶かな

花をあざむく美貌も、死ねば腐臭をただよわせるのみだろう。六道(地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天)の輪廻を解脱して正覚に達することを、仏教は教えている。天も仏説では永遠の世界ではなく、天人は五衰する。正覚に達するには、この世の無を認識し、俗世への、花への、執着を断ち切らねばならない。その仏教は八世紀以降、急速に影響力を拡大する。花の美観の成立の過程は、同時に花への執着の切断を説く教えの普及してゆく時代だった。

花は美しい。しかしうたかたに似た花に執着してはならない。その矛盾した二つの命題の上に、平安朝の「花」は揺れ動くのである。

『古今和歌集』は、すでに述べたように、花を最大の主題とした歌集である。

春たてば花とや見らん白雪のかかれる枝にうぐひすの鳴く(素性法師)

※霞たち木の芽もはるの雪ふれば花なき里も花ぞ散りける(紀貫之)

花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風(良岑宗貞)

ひとつもと思ひし花を大沢の池の底にもたれか植えけん(紀貫之)

これらの歌を読んで容易に気がつくのは、「春たてば花とや見らん」といい「花なき里も」といつているその花のイメージについて、もし読者のがわに暗黙の了解³がなければ、歌の世界は成り立たないということだろう。一首目の花は鶯が鳴いているのだから梅だろうし、最後の歌には「菊植えたるをよめる」と前置きがついている。しかしそれ以上、花がどのような「里」に、どのような姿で咲いているのかは示されていない。問うてはならないのである。不遠慮に詮索すれば、あえかな世界はこわれるかも知れない。

『古今集』が春夏秋冬の四季の流れに沿って最初の巻別を定め、そのことが勅撰^{*}二十一代集の構成の基本となったことはひろく知られている。春の巻の冒頭には必ず雪が降り、梅が咲きそめて鶯が鳴き、まだ咲かない桜が慕われる。『古今』のえがき出すこ

の微妙な季節の移り行きは、かぎりなく美しい。

⁴日本人は四季の移り行きに敏感な民族といわれ、その理由として季節の変わり目の鮮明さがしばしば指摘されて来た。それは一応そうだろうが、しかし季節の変わり目の鮮明さ、ということだけなら、必ずしも日本に独自のものとは言えない。ヨオロッパで冬をすごすと、緑の芽ぶく「春や遅し」と思うし、十一月のバリはボオドレルがうたいヴェルレーヌがうたっているように、ものがなしい季節である。

春のあとには夏が、そして苦しい冬のあとには再び春の蘇りが、訪れる。そういう循環的な世界観は、一般に農耕民族には通用のものである。古代ギリシヤ人は暦が一巡することに過去の王は靈力を失ったとみなしてこれを殺し、新しい春の王をたたと伝えられる。(ギリシヤの暦は八年周期だったらしく、クレタ島のミノス王はホメロスの『オデュッセイア』の伝えるところでは、足掛け九年、王位にあつた。)これがギリシヤの悲劇の原型で、悲劇には必ず王者の死が登場する。

〔I〕春の蘇りの祭には、古代人は往々五穀豊饒と生殖とを同一視したから、性の乱舞がつきまとつた。すなわち、狂躁道^{*オルツイ}である。ギリシヤのディオニソス祭がそうであり、旧約聖書ではモーゼのひきいる民がシナイの野にはいつてから、黄金の仔牛像をつくつてそのまわりで乱交に耽つて神の怒りに触れたとされる。牛の角は半月形をえがいているから、豊饒神である月の神と同一視された。⁵砂漠の神は、土着の豊饒神への信仰を許さなかつた。

〔II〕寒い冬のさなかでも次に来る春を夢み、そうすることによつて彼らは苦しみに耐えた。正月行事はエリアーデによれば、シユメールでもバビロンでも「時間の初めからの再開始、すなわち宇宙開闢^{かいびやく}のくりかえし」(「永劫回帰と祖型反復」)だった。

日本でも正月は明治時代まで、各家々の主婦が暗いうちに若水を汲みに行くという儀式的行事からはじめられていた。京都や江戸を含むたいの各地で、そうだった。正月は宇宙の新しい B であり再開であり、エリアーデのことばをつかえばここでも天地創造時の「祖型への復帰」だったのである。

〔III〕四季のリズムに敏感だったのは、日本人だけではない。しかしヨオロッパの場合には、三世紀以降、キリスト教という宇宙に超越する神への信仰がはいった。東西の四季観を考へる場合に、じつはこの事実の意味の方が季節の変わり目の鮮明さとい

うようなことよりも、重大ではないか。

〔Ⅳ〕キリスト教は砂漠の宗教としての体質を、ユダヤ教から濃厚にうけついでいる。もちろんユダヤ教もキリスト教も、各地に定着してゆく過程では土地の農耕信仰をその内部に組み込むことをして、春祭は過越しの祭や復活祭に転化した。しかし問題は春祭が過越しの祭に、秋の収穫祭が罪の祓いの祭に、変わったことにある。救いは自然の循環に合一することによってではなく、すべてに君臨する唯一創造神からもたらされることになったのである。

〔Ⅴ〕自然神は西欧では、—回教世界でも同じだが—一神教によって放逐された。日本には、この放逐劇はない。自然のリズムを中心とする精神生活は、残ったのである。そしてそのリズムを、Cとして定着したのが九世紀の歌人たちであり、

とりわけ紀貫之だった。当時四季をえがいた屏風絵があり、彼がそれらに触発されたこともむろん無視はできないのだが。

『萬葉集』では巻八と巻十とが、すでに四季による歌の類別を行っている。九世紀末の、菅原道真の『新撰萬葉集』や大江千里の『句題和歌』がそれをうけ、『古今』が定着させた、という順序である。のちの季語も、溯れば源泉はここに発する。(季語は俳句十七文字の世界を四季のリズムに結びつけ、つまりはそういう意味でのコスモロジカルな性格を、十七文字にあたるパイプの役を果たすのである。)

貫之の功績は、単に日本最初の勅撰和歌集を編纂して、日本語の詩の伝統を守ったということにとどまらない。彼が爾後の日本の文学に、あるいはひろくいつて日本人の感性に、もたらした影響ははかり知れない。(村松剛『死の日本文学史』による)

(注)

* 貶下的：低く見る、というほどの意味。

* 真名序：漢文で書かれた序。

* 其実皆落〜：「其の実皆落ち、其の華孤り榮ゆ。好色の家には、此を以て花鳥の使と為し」と訓み、「至有」は、引用部分の

さらに下から返って訓むので、今は省いた。

* 「麗しき美人に遇ひ」：これ以下、『古事記』の原文の表記を生かした記述。

* 記紀：『古事記』と『日本書紀』。

* 故：そのため。

* 阿摩比能微坐：「あまひ」は語義未詳だが、文脈からは、短い時間、の意。

* 勅撰二十一代集：『古今和歌集』から室町時代の『新統古今和歌集』に至る二十一の勅撰和歌集。

* 狂躁道：飲めや歌えやの大騒ぎで、著しく羽目を外すこと。

問一 傍線部1「やや唐突さを感じさせる」とあるが、筆者がそう感じたのはなぜか。最適なもの^①〜^⑤から選び、記号を

マークせよ。解答欄番号は 1。

① 花は和歌の世界では魅力的なものと詠まれ、「めで」られるものであるから。

② 「花」という語が、自然そのものを表す語から比喩的な表現に変化したから。

③ 花を肯定的に扱う文脈から、「実」との対立を抜きに否定的に扱う表現に転じたから。

④ 人の心がなぜ花になったのか、という歴史的な経緯を説明せず、ただ事実を述べているから。

⑤ 『古今和歌集』は、花を最大の主題にした歌集なので、序文で花を否定的に扱うのは不自然だから。

問二 空欄 A に入る語として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 2。

- ① 循環性 ② 可変性 ③ 一過性 ④ 安定性 ⑤ 恒久性

問三 傍線部 2「農耕民族としての通念」とは、ここではどのような意味か。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 3。

- ① 花が豊かに咲けば、来るべき豊饒が期待されるということ。
② 花を美しいと感じるのは、どの農耕民族でも同じだということ。
③ 花を素朴に美しいと思い、その悪い面などは考えないということ。
④ 花の命が短いことを日々の農耕の経験から知っているとということ。
⑤ 花が咲いては散るという自然の摂理に生活の基本を持つということ。

問四 ※の歌「霞たち木の芽も…」に用いられている掛詞を、左の例に従って、二つの意味がわかるように示せ。問四は解答用紙(その2)を使用。

(例) まつ(待つ／松)

問五 傍線部 3「暗黙の了解」とは、どのようなことをいうのか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 4。

- ① 「花」の歌は、花の種類を示さず、読者にそれをあてる興味を残してあるものだという事。
② 「花」の読み方に決まりはなく、読者それぞれの感性に従って自由であつてよいということ。
③ 「花」は美しいのだが、執着してはならない、という矛盾を受け止めながら読むということ。
④ 「花」は、常に美しさとはかなさという両面を備えていることを理解して、歌を読み取るとということ。
⑤ 「花」という語は、細かな情報まで含めなくとも、その意味するところを受け止められるということ。

問六 傍線部 4「日本人は四季の移り行きに敏感な民族といわれ」とあるが、その理由を筆者はどのように考えているか。本文全体の主旨をふまえ、三〇字以内で答えなさい(句読点を含む)。問六は解答用紙(その2)を使用。

問七 傍線部5「砂漠の神」と同一の意味で用いられている神は何か、本文中から抜き出して五字以内で答えよ。問七は解答用紙(その2)を使用。

問八 空欄 B に入る語として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 5。

- ① 反復 ② 蘇生 ③ 修正 ④ 創造 ⑤ 出発

問九 傍線部6「もちろん」とあるが、なぜ「もちろん」なのか。その理由として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 6。

- ① ユダヤ教もキリスト教も、砂漠の宗教としてもともと包容力の広い宗教であるから。
② 世界的な宗教になるためには、適度に古い宗教と妥協して拡大することが得策だから。

③ 砂漠の宗教は、農耕信仰をそのまま取り入れないと、農耕地帯では発展することが難しかったから。

④ 一般に新しい宗教が古い宗教と接触して定着するときには、古い宗教の要素がある程度取り込むものだから。

⑤ 新しい神を持つことは、従来の宗教とはまったく異なる原理を持つことになるため、排他的になりがちなから。

問十 空欄 C に入る語として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 7。

- ① 神話 ② 常識 ③ 美学 ④ 感性 ⑤ 歴史

問十一 次の一文は、本文中の〔I〕〔II〕〔III〕〔IV〕〔V〕のいずれかの箇所に入る。この一文が入る最適な箇所を、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 8。

はなしが少しばかり横にそれたが、要するに宇宙のリズムとの合一のなかで生きていたのが、一般に古代農耕民の生活だったのである。

- ① 〔I〕 ② 〔II〕 ③ 〔III〕 ④ 〔IV〕 ⑤ 〔V〕

問十二 『古今集』とほぼ同じ頃成立した作品を次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 9。

- ① 懐風藻 ② 日本霊異記 ③ 和漢朗詠集 ④ 竹取物語 ⑤ 蜻蛉日記



